かち込め！！ヒャッハー爆走族！！

西野レイラ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウエスタンなヒャッハーが自称正義の連中を薙ぎ倒すお話だぜ!!

目次

対決　革命思想集団!! ―― 1
対決　過激信教団体!! ―― 6

対決　革命思想集団!!

「ヒャッハーここは俺たちの縄張りだぜー」

暴力革命により既存の構造を破壊し、貧富の差を逆転せんとする、過激組織ＮＵＫＯＤＭＭ（Ｎａｔｕｒａｌ　Ｕｔｏｐｉａ　Ｋｉｎｇｄｏｍ　ｏｆ　Ｄｅｍｏｃｒａｃｙ　Ｍｏｒｔａｌ　Ｍｉｌｉｔａｒｙ）が徒党を組んで、資産家の家や商店から略奪を繰り返しては練り歩く地獄絵図。

しかし、ダバダ州最大のバイクギャング『ヘルデビル』の軍勢が、その進路をバイクで阻んだ。

「ヒャ→ッハー←!!　悪魔を差し置いて地獄を我が物顔で歩くたあ、太ェ野郎だなぁ!!　ハーハッハッハッ」

ヘルデビル２０代目族長、スゲイヨ・オーレツョイは、空に吸い終えた葉巻（UPMAN）を投げ捨てながら豪快に笑った。

その威圧感は、コムギクニ共和国のギャング５０００人を束ねる王に相応しい王気（オーラ）だった。

先程までやりたい放題だったＮＵＫＯＤＭＭ、通称ヌコダムは沈黙した。
しかし、ヌコダムの中から顔中に夥しい数のピアスを付けたラッパー風の男が出て来て騒ぎ始めた。
どうやら自分たちは『正しき民意』に基づき革命を起こしていると言いたい様だが、如何せん早口過ぎて常に二日酔いのヘルデビルのメンバーには聞き取れなかった。

が、しかし――――

「五月蝿えよ」

ヘルデビル副長、アィーツゥ・ヤーヴェイが投げた酒（HENESSY）のボトルがその男の頭に直撃した。

「行くぞ野郎共!!」

バイクの軍勢は、良識派を気取るテロリストに向かって特攻した。
全員飲酒運転でフルスロットルのエグゾーストを金切り上げるヘルデビルのメンバーだが、事故る様な弱者はこのチームにはいない。
ヌコダムの有象無象を男女活動家ゴロツキ関係無く弾き飛ばす鋼の二輪（HALREY）。
スゲイヨは音楽（Morbid Devil）を全開で流すと、瞬く間に１０人は撥ね飛ばした。

「付いて来いや」
その刺激をアィーツゥ以下のメンバーが受け取らない筈が無い。
「「「「WHEELIEEEE(ウィーリー)!!!!」」」」
マフラーが震え、ガスが吹き、スポークは軋み、焦げた路面は熱を放つ。
地獄絵図を連れて来た人間達は、真の地獄の住人に恐怖した。
銃で対抗しようとするが、そんなものは無駄だ。
中には今更対話で自分達の正当性を主張する者もいるが、そんなものも無駄だ。

「テメーらに悲しい過去があっても知ったことじゃねぇよ」
今更被害者ぶりだした男に対して、アィーツゥ・ヤーヴェイの従妹である特攻隊長マカセェーナ・ウチガボコッゾが、超絶美技で縦回転するバイクから踵落としをかます。
「うっ美しい白…」
男は謎の言葉を呟いてその意識を失った。
『正しき民意』をスローガンに、コムギクニを席巻する勢いで加速していたヌコダム運動だったが、世界にその運動を広げる寸前で、地方で勢力を示すバイクギャングに止められた。
「「「「ヒャッハー」」」」

『正しき民意』という錦の御旗は、とうの昔に踏み潰されている。
組織の旗を持った奴は、組織の顔である。
当然最初に狙われる故に、その覚悟が必要だった。
スゲイヨにはその覚悟はとっくに出来ていた。
しかし、ヌコダムのダバダ方面担当指導者は、自分の所までアィーツゥとマカセェーナが切り込んでくると、驚いて旗を捨てて逃げてしまった。
マカセェーナはその旗に火を灯した煙草を落として燃やし（彼女自身は葉巻（COHIVA）は吸わない）、アィーツゥはダバダ方面担当者の首根っこを掴むとそのまま近くのフェンスに叩き付けた。
スゲイヨ達は、ヌコダム参加者が全員戦意を失うまでバイクで踏み続けた後、近くの崖から纏めて投げ捨てた。
ダバダ州に何時もの日常が戻って来た。
ダバダ州の人々もホッとしたのか、家から出て来ている。
スゲイヨは叫んだ。
「おいてめえら、酒持ってこい!!
後はこの辺りの美人を１０人連れて来い!!

全員抱いてやるわ!!
ハーハッハッハ!!」
ダバダ州に騒がしくて過激な日常が戻って来たのだ。

対決　過激信教団体!!

ヘルデビルは、チュットゥ地方にいた。
それはサトウテルヲ率いるテルヲリスト教徒による支配と対決する為だ。
ヘルデビルを差し置いて最強を名乗るテルヲ教徒は、テルヲ王国（KINGDOM）を声明発表して、そこの支配者である事を主張した。
テルヲ王国は、バイクに乗り爆走する事を死刑とする法律を作った。
それはテルヲ教典において、【地獄の悪魔が鋼の馬に乗ってやってくる。信徒はこれを打ち倒すべき】と書かれているからだ。
教典に書いてあるならば、原理主義的にそうあらねばならない。
逆らう者には無慈悲なる制裁を。
これがテルヲ教徒のやり方だった。

ヘルデビル構成員（Membership）は激怒した。
彼らにはテルヲ教徒の在り方が許せなかった。
同じバイク好きがバイクと共に焼かれる様を、公開された動画で見せられて、許せる

筈も無かった。
その動画を知ったメンバーはチームの溜まり場に集まった。
スゲイヨなら俺達を率いてテルヲをブッ殺してくれると。
しかし肝心なスゲイヨはいなかった。
次の日も、その次の日も姿を見せなかった。
「なあ副長、カシラはどこにいるんでぃ？」
アィーツゥは冷静に答えた。
「リーダーはあの動画を見てカンカンだ」
そう言いながらアィーツゥはショット（Jose Cuelbo）を喉に流し込んだ。
「でも、カシラの神チュー（HULREY）はここにありますぜ？」
「はっ、モンスターなのはバイクじゃなくあの人の方だ」

そう言ってアィーツゥは天井を見上げた。
きっととっくにチュットゥのゴロツキどもをのし上げて、現地の女共を抱きまくって、現地の処女厨を泣かせているだろうなと思いを馳せながら。

その半日前の事。

チュットゥにスゲイヨは居た。

チュットゥには既にテルヲ王国が定めた秩序がある。

則ち、テルヲ教の秩序を破壊すれば、その秩序の維持者であるテルヲ王国体制側が引き出せる。

そこまでは考えてはいなかっただろうが、スゲイヨは日中から酒を飲み、女とヤり、バイクに乗っていた。

テルヲ教の戒律という戒律を破戒しつくす様は、過激派でない一般のテルヲ教徒の住民にさえ不快感を抱かせるのには十分だった。

文句を付けてくる奴がいればボコボコにして、苦情を言う奴がいればボコボコにした。

秩序を破壊する行動こそ、新しい秩序となり得る。

それは本来、テロリズム的な行動であったが、スゲイヨはそこまでは考えてはいなかった。多分。

テルヲ王国の警察（兼軍人）である戦闘要員がスゲイヨに近付く度に帰って来なくなった。

頭の形が変形していたり、足が一周回っていたりしてるから、そりゃあ帰っては来れなかったのは仕方ない。

スゲイヨは適当に歩いて、未だに晒し者にされていたバイカーの死体とバイクを見つけると、そこに立ち止まり黙礼した。

近くの男の胸倉を掴み、死者にこっそりバイクを提供したであろう店を聞き出すと、死体を引っ張って店に乗り込んだ。

「ジジイ、バイク寄越せ」

これ以上説明は要らなかった。

スゲイヨは強引に店主からバイク（DRAG-ON・STER）の鍵を受け取ると、店内で数回フかした後、そのまま外にカッ飛ばした。

「異邦の者よ、どうか息子の仇を…」

その老人の言葉は、マフラー（フレアエンドメガフォン）に掻き消された。

テルヲ王国正門前の警衛所。
急接近するエグゾースト音と共に、警戒度はレベル　最（Invoke Special）大　まで引き上げられた。
「車種は分かるか!?」
「えっと…っ、確か、ＤＲＡＧ―ＯＮ・ＳＴＥＲの車だったな。ヤマバの」
エグゾースト音はそうしている間にも大きくなって来る。
「奴は今何処に!?」
現場の長がそういった途端、そいつの頭が踏み潰された。
空から降って来たバイクによって。
「ＳＨＨｉｉｉｉｉｉｉ　グッナイファッキンガイ」
スゲイヨはそのまま長に報告していた男を掴むと近くにいた別の男に投げ付けて、そのままバイクを加速させると、ドアを突き破って奥へ進んだ。
テルヲ王国の最深部まで、経典にある教えをモチーフにした高級な扉を幾つもブチ破

り、スゲイヨは進んだ。
歴戦の傭兵の様な男を即座に挽き倒し、指導層らしき貧弱な老年の男が何か言い掛ける前にタコ殴りにした。

そして、この日テルヲ王国は一斉放送と共に消滅した。
「テメーらの信条なんざＦＵＣＫだ。俺もお前らもＦＵＣＫだ。どいつもこいつもＦＵＣＫなんだから、好きにＦＵＣＫして好きに死ね。
雁字搦めのＦＵＣＫは捨てて、獣(Doggy)みたいにＦＵＣＫしろ。
お前らがＦＵＣＫしなくても俺は勝手にＦＵＣＫするぜ!!Ｙｏ―Ｈｏ―!!」

その宣言の通り、この地域の女１００名と１日で犬の様にＦＵＣＫして、酒という酒を飲んで、バイクで爆走した男は、秩序を壊す事によって、新たに自由という秩序を打ち立てた。
以後、この地域は酒とバイクと風俗の町として、後世に受け継がれる事となった。